

## 日中韓の大学間交流による学生の対外意識の変化

2021年2月18日

常葉大学法学部 講師 杉村豪一

### この研究のテーマ

本日は大変貴重な機会を与えてくださりまして、ありがとうございます。今回は「日中韓の大学間交流による学生の対外意識の変化」ということで、留学についてのお話をさせていただきます。留学すると人間の意識というのは変わるもので、他国に対する認識であるとか自分のアイデンティティとかが、留学する以前のものから少しずつ変化していくということが想像できるかと思います。それが実際にはどういうものになっているのかということをお調べしたので、その報告をさせていただきます。

今日は日中韓の留学についてお話ししますが、この日中韓の国際関係は最近非常に悪くなっているとされています。もちろん政治レベルで仲が悪いということはありませんが、毎年、市民がデモしたり、反日とか嫌韓とか、そういう運動をしたりして、よくニュースになっています。コロナが流行してから、そういうことはあまり報道されなくなっていますが、それ以前は頻繁に報じられていました。国際関係が非常に悪いことで、それにつられて市民レベルでのネガティブな感情というものが目立つような世の中になってしまっているという所もあります。この現状をどうにかすることが、近年の大きな課題になっています。

その解決の糸口として期待されているものが、今回取り上げる大学間交流です。現地に大学生が行くと、そこでいろいろな人と触れ合っ、誤解が解けたり、他の国の人に対して親近感が湧いたり、仲良くしようと思うようになっていくことがあります。そういうふうにして、国境を越えた人と人とのつながりというのが成熟していきたくてという期待があるわけです。ただそういうメカニズムというのは、想像はできますけれど、実際存在するのかわかるとは詳しく見てみないとわからないことです。今回はこの点を調べてみました。具体的には、海外の大学で学ぶと、彼らの他国に対する認識であるとかアイデンティティ（私は日本人ですとか、私は東アジアの一員ですとか）がどう変わるのかということが検討課題となります。この点について、今回は大学間交流プログラムの中でも非常に高度に制度化された日中韓の協力事業である「キャンパス・アジア」を対象に行ったアンケート調査の結果から考えてみたいと思います。

### 「キャンパス・アジア」とは？

今回の分析の対象となる「キャンパス・アジア」がどういうものなのかということをお、まず簡単に説明させていただきます。「キャンパス・アジア」は、日本・中国・韓国が、国家レベルで制度を組んで実施している留学のプログラムです。こういうプログラムができた背景には、高等教育の国際化の中で東アジアの大学が自分たちの地位を高めていかないとはいけない、という現代特有の逼迫した状況があります。また、この地域の国々に留学したい

という人も増えていて、そういう需要にも答えないといけないという側面もあります。もちろん、先ほど申し上げたように政府としても国家間の関係が非常に悪くなっており、政治レベルでもそれを何とかしないとけないということもあります。アジアを重視して、できるところから仲良くやっつけていこうじゃないかと、模索が行われているわけです。時期によって、それが積極的にされるかどうかというのは、かなり変わるわけですけど、基本的には国際関係を何とかしていきたいという政治的な意思は継続していると思います。このような背景の下で、このプログラムは作られました。そこで目的とされているのは、設立の背景にも関係しますが、まず、プログラムを通じてこの東アジアという地域で国際的に活躍する有能な人材を作り上げること、すなわち人材育成です。もう一つが東アジア共同体を視野に入れ、相互理解を促進していこうということです。つまり日中・日韓は現状では仲が悪いけれど、みんなで誤解を解いて、理解し協力し合えるような、そういった土壌を作っていきましょう、ということです。

時系列的に見ると 2008 年から現在に至るまで、この制度は段階的に発展してきました。まず、2009 年の第 2 回日中韓サミットで大学間交流の実施が決まりました。鳩山政権の時代です。2011 年から「キャンパス・アジア」の本格的な実施に先行するパイロット・プログラムが、実験的な意味を込めて開始されました。5 年やってみて、まあまあうまくいったということでプログラムを拡大することになり、第二期プログラムが開始され、それが今も続いています。

#### 「キャンパス・アジア」プログラムにおける学生の移動数

パイロット・プログラムが開始された時点で、「キャンパス・アジア」には 10 のコンソーシアムがありました。ここでは、日中韓の各大学を含む各コンソーシアムにより、それぞれに異なる独自のプログラムが展開されました。この中には、たとえば東京大学と北京大学とソウル大学という、各国を代表する大学が参加するものもあります。他を見ても中国・韓国は特にレベルの高い大学が揃っているのではないかと思います。

ちなみに、現在はパイロット・プログラムが終わって、さらに枠組みが拡大しもっと多くの大学が「キャンパス・アジア」に参加するようになっています。それに伴い、学生の移動も年々増えています。ただ去年はコロナの影響があり、どういう状況になっているのか、よくわからない部分が多くあります。もしかしたら人数自体が減っているか、ないしは実際に現地に行かないでオンラインでという留学の形も増えているのではないかと思います。

今回アンケートを行ったのは、パイロット・プログラムの開始時から「キャンパス・アジア」に参画している神戸大学、復旦大学、高麗大学のコンソーシアムです。大学院レベルのプログラムになっておりますので、かなり専門的な知識を期待して留学する人が多いプログラムとなっています。神戸大学は私の前任校でしたので、このコンソーシアムにお世話になり、アンケートを実施させて頂くということになりました。

## 先行研究①：欧州

留学に関して、今回「キャンパス・アジア」を事例に分析を行うとお話をしたわけですが、この分野でどういう研究が行われているのかということだけ、先に簡単に説明させてください。実は、この「キャンパス・アジア」のお手本になっているプログラムがあります。ヨーロッパの「エラスムス・プログラム」というものです。ヨーロッパでは EU に加盟している国の中で大学へ行こうとした場合、他の国の大学でも、自分の国の大学とほぼ遜色ないような条件で入ることができるという状況にあります。言語的な問題もありますが、少なくともドイツの人がオーストリアに行っても基本的には何の不自由もなく大学生活を送ることができます。そういうようにヨーロッパでは非常に大学の交流、学生の行き来がしやすくなっています。これは高等教育に限ったものではなくて、経済的な分野でも、政治的な分野でもヨーロッパは国境の壁を取っ払うということを盛んにやっています。この「エラスムス・プログラム」も大学教育の歩調を合わせ、制度的な規格化を図ろうという意図があって行われているものです。

「エラスムス・プログラム」はこの分野では非常に成功を収めているプログラムだと言われています。このような取り組みの背景には、カール・ドイチュという非常に有名な人が主張した「社会交流主義」というものがあります。長期にわたって人々が交流すると、次第に「われわれ」、「仲間」という意識が生まれてくる。そうすると相互に信頼に基づいた共同体の構築が促進されるだろうというわけです。つまり、この共同体の構築というのは EU を想定しているわけですが、国際統合において留学を通じた人的交流が、ポジティブな効果を発揮するだろうと期待されているのです。

そういう考えの下で「エラスムス・プログラム」は、非常に重要な EU のプログラムの一つになっているわけですが、実際に成果を上げているのかという点は、また別の問題です。この点については、すでにいろいろな研究が行われています。そうした研究の中で、「エラスムス・プログラム」を通じた大学間交流はヨーロッパ単位のアイデンティティを強化しているということが実証的に示されています。イメージとしては、もちろんフランス人はフランス人ですし、オーストリア人はオーストリア人ですが、それとともにヨーロッパ人である、といった二重のアイデンティティというものができてきているという感じです。

ただし、単純にアイデンティティが作られるわけではないという研究結果も出ています。アイデンティティの形成には様々な条件が関与しており、例えばイギリスは島国だから、あまりその効果が強くないとか、他にも現地でどういうことを経験したのか、どのように現地の人と触れ合ったかどうかということで留学による効果は異なるとか、そのようなことが指摘されています。そもそもアイデンティティって何なのか、ということ掘り下げて考える必要もあります。この点については、アイデンティティにもいろいろな側面があって、ある側面では留学経験はアイデンティティに影響するけれど、別の側面では今一つ

である、というようなことも言われています。とにかくアイデンティティを強化するといっても、いろいろな条件があり、また見方次第で強化しているとも言えるし、していないとも言えるというのが研究の現状です。ただ、概ね何かしらの効果はあるだろう、ヨーロッパのアイデンティティ構築や「われわれ」意識を醸成するという点において、意味がないということはないだろう、ということは総意として認められているのではないかと思います。

## 先行研究②：東アジア

ヨーロッパの例を参考にしつつ、アジアでも大学間交流は行われていますが、従来的には相互理解の促進を図るという趣旨はあまり注目されていません。日本や中国、韓国で大学間交流を行う背景には、もっと経済的な意図があるとされています。グローバル化により、教育市場を拡大しないといけない、各国の大学の競争力も上げないといけないという、協調よりも競争が前面に出るような感じで大学間交流は発展してきたと言われていています。高等教育は、一種の国境を越えたサービス商品だという見方がされているわけです。しかし、実質的にサービス商品であったとしてもアジアを枠とした留学プログラムが作られずと、その中で多くの人が行き来するようになるわけです。先行研究では、このようにサービス商品の枠と、人の行き来の枠が重なり合うことで、結果的にはその範囲内での人の交流が促進されているのではないかとされています。

「キャンパス・アジア」に関しては、そういった背景を踏まえつつも、もう一步踏み込んだ研究が進んでいます。韓国の研究者が行った研究によりますと、「キャンパス・アジア」に参加すると、留学先の国に対する心理的距離が縮まったり、その国に対する認識が改善したり、国を越えたアイデンティティが芽生えたりといった効果があるという研究結果が出ています。しかし、東アジアを対象とする大学間交流の研究の蓄積はまだ十分ではありませんので、この点はどんどんやっていく必要があります。この研究はそういった背景を受けて開始されました。「キャンパス・アジア」はヨーロッパを参考にしていますが、ヨーロッパでは得られた留学の効果というものが東アジアでも得られるのか、大学間交流はアジアの地域主義にも貢献しうるのかということが、この研究の中心的な問題意識になります。

## アンケート調査

先ほど申し上げたような問題意識に基づいて今回のアンケート調査は行われました。アンケート実施に当たっては神戸大（日本）、復旦大（中国）、高麗大（韓国）のコンソーシアムにご協力をお願いしました。このプログラムは大学院を対象とするものなので学生は英語で授業等を受けています。しかし英語でアンケートをやると回収率が悪くなるかもしれないということで、神戸大の人には日本語、復旦大の人には中国語、高麗大の人には韓国語でアンケートを用意して、web アンケートを行いました。そうしたら約 100 人から有

効な回答を得ました。これは結構良い回収率です。実施期間は、少し前になりますが 2019 年 12 月から 2020 年 3 月の終わりまでです。表 1 が、どこの大学からどこの大学へ行った人がアンケートに答えてくれたかを示すものです。若干プログラムにより多い少ないはありますけれど、ほぼ満遍なく調査ができたのではないかと捉えています。

### 次の国に対する印象

ここからは、実際にどういう結果が出たのかということ報告していきます。一番重要なのは対外意識、つまり他の国のことをどのように思っているのかということや、国を越えたアイデンティティが形成されたかということです。主たる目的はこのようなことですが、ここでは少し関心を広げまして、協力関係についてポジティブにとらえているのかということや、人材育成ということの一つの目標に展開しているプログラムですので、進路に影響を与えているのかということについても見ていきたいと思えます。

図 1-1 は「次の国に対する印象」についてのアンケートの結果です。これは留学後に聞いた、現状での各国に対する印象を示しています。ここでは、日本人の日本に対する印象とか、中国人が中国に対する印象とか、そういった自国に対する評価は全部省いてあります（以下の「親近感」や「関心」に関する分析についても同様に扱っています）。たとえば、日本に対する印象は、韓国人、中国人の日本に対する印象を表しています。中国、韓国に対する印象についても同じようにまとめています。これを見ますと、概ね印象が「良い」という結果が出ています。特に日本に対しては印象が「良い」という人が半分を超えています。中国は「良い」という人が半分を超えていないけれど、「やや良い」を入れると半分以上になります。全体的に見ても留学経験者は良好な意識を持っていると言えます。

重要なのは図 1-2 です。留学に行って、この意識がどのように変わったのかということこの図は示しています。これを見ると、留学が効果的に働いたということが読み取れると思います。日本に対する印象の変化に注目すると、最も左側の「良くなった」と書いた人が半分以上に上ります。中国の場合は半分以下ですけど、「変わらない」という所と「悪くなった」という所と比べてみますと、全体として、留学に行っても悪くならないし、半分くらいの確率で良くなるということが言えるかと思えます。韓国についても同様です。

### 次の国に対する親近感

「印象」と似ていますが、「親近感」についても聞きました。図 2-1 を見ると、対象によっては明確に親近感を「感じる」という人はあまり多くない場合もあるようです。日本に対しては、「やや感じる」を含めると親近感を示す人は半分を超えます。今回は各国の親近感だけではなくて、東アジア全体の親近感に対する親近感も聞きましたが、東アジアに対する親近感他対象に比べ弱いようです。

図 2-2 を見ると、ここでも留学の効果は非常にポジティブであるということが出ています。

親近感が強くなったという人が、どの場合も半分を超えています。「変わらない」という人を含めると、ほぼ100%に近くなりますので、悪い効果が出ることは少なく、良い効果はかなり期待できる、ということが言えるかと思えます。

#### 次の国に対する関心

図3-1は「関心」です。各国それぞれの地域に対して、どれだけ関心がありますか、ということを行いました。「関心がある」「やや関心がある」を入れると、みなさん比較的に各対象に対して関心を抱いていると言えます。今回は東アジアに加えて国際社会一般についても聞いています。

図3-2は留学に行ってこの意識が変わったのかどうかということを示していますが、これを見ると留学を経て関心が高まっていることが明確に分かります。留学に行くと、いろいろなことに対する関心が高まります。特に国際社会に対しては、「キャンパス・アジア」に限らず、留学に行けば国際社会を意識せざるを得なくなりますので、関心はかなり高まってくるのだと思います。

#### 次の項目に対する帰属意識

今回はアイデンティティ、つまり帰属意識について聞いたものを見てみましょう。「次の項目に対してあなたは共感しますか」という質問項目で、「私は地域社会の一員である」「私は東アジアの一員である」というような形式で、各文言に共感するかどうかを聞いています。今回は国別でやっても仕方がないので、国より低いレベルの「地域社会」、国家レベルの「自国民」（日本人だったら日本、中国人だったら中国、韓国人だったら韓国）、国を越えたレベルの「東アジア」の一員と「世界市民」の一人、最後に独立した「一個人」という項目を設定しました。図4-1を見ると、プログラム参加者はどの項目にも共感していることがわかります。当然ながら一個人であるとか、自国民に対して、というのは他に比べて共感のレベルが高くなっています。

図4-2は留学がどのように影響していたのかを示しています。非常に明確に「キャンパス・アジア」の意図に沿った効果が表れています。中でも、一番影響が表れているのが東アジアという単位です。東アジアの一員であるということに関しては、そういう意識が「強くなった」という人が増えているわけです。少なくとも半分くらいの方は、強くなったと言っていますので、かなりの効果が出ています。注意しないといけないのは、東アジア単位でのアイデンティティが強くなっているというだけではないということです。同時に留学に行くことで自身のナショナル・アイデンティティを意識したという人がかなり多いということもわかります。また、留学先では自分の力で一生懸命やらないといけないので、独立した個人としての感情も強くなっています。もちろん、世界市民というアイデンティティも強まっています。

## 次の国や地域での協力関係

図 5-1 は協力関係についての結果です。次の項目に対して、協力していった方が良いかどうか、ということを行いました。例えば「日本と中国はもっと協力していった方が良いですか」というような形式で質問しました。プログラム参加者は、各項目に対して概ね協力していった方が良いというように感じているようです。なお、日本と中国の協力関係ということを考える時に、日本人と中国人が考える協力関係と、それ以外の人（つまり韓国人）が考える協力関係とは、少し重さが違うので、ここでは関係ない国の人の回答を全部除いています。つまり、日本と中国の協力関係については日本人と中国人だけ、中国と韓国は中国人と韓国人だけ、韓国と日本は韓国人と日本人だけ、日中韓、東アジア、世界全体に関しては全ての人を入れて統計をとっているということです。

図 5-2 が留学後の変化ですが、協力関係が有益だと感じるようになったという人が半分以上にのびります。「日本と中国」などの国家間関係についてもそうですし、「日中韓」についても協力が利益を生むと思うようになった人が多いようです。「世界全体」でも協力すると良いことがあると思うようになったという人が半分以上います。

## 次の国や地域での協力可能性

少し論点が変わりますけれど、図 6-1 は協力した方が良いとしても、実際に協力できると思うか、ということを行いました。これに対しては、これまでの結果に比べるとシビアな回答が返ってきています。日本と中国とか、中国と韓国とかは「可能だ」と答える人が多いですけれど、少なくとも他の項目に関しては容易ではないと思う人がかなり多いようです。特に韓国と日本は容易ではないと思っている人が多いです。韓国人が日本人に対して思っているところもあるでしょうし、日本人が韓国人に対して思っているところもあるでしょうけれど、国際情勢の悪さをなんとなく反映しているのかなと感じます。

図 6-2 を見ますと、留学を通じて、当初は難しいと思っていたけれど、意外と協力していただけるのではないかと思った人はそれなりに多いということがわかります。日本と中国、中国と韓国は、韓国と日本より多くなっています。こうした差はありますが 2 国間の協力関係について、楽観的になったという人は少なくありません。日中韓、東アジア、世界全体についても同様です。変わらないと答えた人も多いのですが、全体的に見て悲観的になったという人は少ないようですので、対象により強さの違いはありますが留学の影響は協力関係を楽観視させるような方向に働くのだと言えます。

## 就きたい仕事

図 7 は進路について聞きいたものです。棒グラフの左側が留学前、右側が留学後です。「キャンパス・アジア」の目的の一つは、地域で活躍する国際的な人材を育成することでした。そこで、「留学前にどう進路を考えましたか」、「留学に行ってからどう考えるようになりましたか」ということを行いました。大学院レベルなので、「国際公務員等」など国

際機関での仕事を望む人は、最初から多いのですが、留学に行った後で少しだけ増えています。「民間企業社員」が次の所にありますけれど、これも留学後、増えていると言えます。日本は特にそうですけれど、大学を出たら就職しないといけないという風潮があり、将来就きたい仕事を想定して大学院に入るけれど、いざ新卒採用のタイミングになると、どこかの企業に就職しておきたいわけです。そのような同調圧力もありますので、進路希望が民間に流れるということは一般的なことなのではないかと思います。他方で、その隣の「大学教員等」が減っています。研究者になろうと思って大学院に入るけれど、非常にこの業界は求人が乏しいらしいということがわかって、民間に切り替える人がいるので減るわけです。

国際公務員も実際になるのは厳しいと言われています。就活という時になったら減るのかなと思いましたが、留学後も減っておらず、逆に少しですが増えていることは、評価しても良いのではないかと思います。同様に「NGO/NPO」の所も増えていますが、これも評価できることだと思います。ただ統計的に明確な違いというわけではないので、あくまで私の主観的な意見です。あまり参考にはしないで頂きたいのですが、就職にも少しだけポジティブな効果が出ているということが言えるのではないのかなと思います。

## 結論

この研究の目的は、東アジアの大学間交流が対外意識や地域的なアイデンティティに対し、どのように影響するのかを明らかにするというものでした。少なくとも「キャンパス・アジア」への参加は友好的な対外認識や地域的なアイデンティティの形成を促すということがわかりました。印象が良くなっているとか、東アジアという枠組みでの帰属意識が強くなっているとか、そのようなことをアンケートで拾い取ることができましたので、東アジアでも留学には一定の肯定的な効果があるということが言えるかと思います。

ただし、注意しないといけないのは東アジア以外の他の対象についても同様のことが言えるということです。世界市民とか国際社会に対する関心や共感も上がっていましたので、単純に東アジアに限定して影響が出るわけではないのです。このようにいろいろなアイデンティティに対して、それを強化するような効果が留学自体におそらくあるのだらうと思います。もう一つ重要なことは、単純に留学すれば良いというわけではなくて、おそらく実際に留学した先で、学生が何を体験するのかという点が影響の度合いを決めるのだらうということです。このコンソーシアムでは、渡航先により教育の内容がかなり違います。実際のところ、渡航先ごとに影響の度合いには差がありました。また、プログラムへの満足度によっても各項目に対する影響の強さは異なっていました。いろいろなことをやって、いろいろな経験をした人は、おそらく満足度が高く、そのため留学による影響をかなり強く受けているのだと解釈することもできると思います。満足度が低い人は、環境になじめなかったということが逆に言えるかと思いますが、その辺はインタビューしてみないとわかりません。

今日報告した結果から何が言えるのかというと、東アジアでもヨーロッパのように大学間の交流は、学生の国際認識という点で、高く評価できるということです。ただし、やみくもに留学プログラムをやれば良いということではありません。そこには、いろいろな要因が関係してきます。よく考えてプログラムを設計しないと見込んだ効果が表れないということも確かなのではないかと思います。大学間交流をやるなら、きちんと調査して、練りに練ったプログラムを展開するということが必要であるということです。

いずれにせよ、留学は国際関係上、思いのほか良い結果をもたらすものだということは確かなのだと思います。

ご清聴ありがとうございました。

(本研究は科研費「日中韓大学間交流と北東アジアにおける集合的アイデンティティの形成」(18K01467)の助成を受けたものである。)

以上